

# 古典文法トレーニング 長文課題 品詞分解と現代語訳

## 大問十四（出典：『更級日記』）

◎品詞分解（名詞は基本的に非表示。非活用語は基本的に初出のみ。同色の助詞は同内容を示す。）

帝、后、皇女サ下二用尊（作）失サせたマまハひ四ぬ終と思し尊惑ハひ四、求マめたマま二ふ尊に、「武蔵格助（体修）の国格助（体修）の衛士格助（体修）の男格助（体修）なむ、いと副香シクば体し体き体物格助を格助首格助に格助引格助き格助か格助けて格助、飛バぶ四や四う四に格助逃カげ下二用過去・体ける格助」と格助申格助し格助出格助で格助て格助、この男格助を格助尋ナぬ下二用過去・体る格助に格助な格助かり格助け格助り格助。  
論クなく格助も格助との国格助に格助こ格助そ格助行格助く格助ら格助め格助と格助、公格助より格助使格助ひ格助下格助り格助て格助追ラふ下二用に格助、勢多ラの橋下二用毀副れて副え副行副き副や副ら副ず副。三月ハといハふ四に格助武蔵カの国カに格助行カきカ着カきカてカ、この男ナを下二用尋下二用ぬ下二用る下二用に格助、この皇女ナ、公使尊ひ下二用を格助召ラして格助、「我ラさ体る体べき体に格助や格助あり格助け格助む、この男シクの家用ゆ用か用しく用て用、率ワて用行カけカと用言ハひカしかハはハ率カて用来カたり用。いシクみ用じ用く用こ用あり用よ用く用お用ほ用ゆ用。この男サ罪用し用凌用ぜ用ら用れ用ば用、我係はい副か副で副あれ副と副。これも前係の世副に格助この国副に格助跡副を副垂副る副べき宿世係こそあり係け係め係。はや副帰ラり副て副公係に格助この由係を格助奏係せ係よ係と係仰係せ係ら係れ係け係れ係ば係、言係は係む係方係なく係て係、上ラり用て用、帝係に格助「か係くな係む係あり係つ係る係」と係奏係し係ければ係、「いクふ用か用ひ用なし終。その男係を格助罪係しても係（※1）、今係はこの宮係を取係り係返係し係都係に格助帰係し係奉係る係べきにも係あ係ら係ず係。竹芝カの男カに格助、生カけ用ら用む用世用の限用り用、武蔵カの国カを格助預カけ用取カら用せて用、公事係も係な係さ係せ係じ副。ただ副、宮係に格助その国係を格助預カけ用奉カら用せたカまカふカ」由ラの宣旨用下用りに格助ければ係、この家係を格助内裏係の如比く用造マり用て用、住マませ用奉作り用ける家係を格助、宮係など係失副せた副ま副ひ副に格助ければ係、寺係に格助な係した係る係を格助、竹芝カ寺カといハふ四なり終。

※1：テキストの掲載範囲は、帝の台詞の一部で切れてしまっているので、文末まで延長して記述した。

## ◎現代語訳（↓『ステップアップノート30 古典文法トレーニング』参照）

帝と后は、皇女がいなくなれたとご心配になり、お探しになったところ、「武蔵の国の衛士の男が、たいそいい香りのする物を首にひきかけ（＝皇女自体を担ぎ上げ）て、飛ぶように逃げていきました」と申し出るので、この男を捜したが、いなかった。論じるまでもなく故郷へ行っているのだろうと、朝廷より使が（武蔵国へ）下って追うと、勢多の橋が壊れて渡ることができない。三か月かかって使は武蔵国に行きついて、この男を探すと、この皇女が、朝廷の使をお呼びになって、「私はそうなるはずの運命であったのだろうか、この男の家が見たくて、連れていけと言ったので（男は私を）連れてきた。たいそうここは居心地よい場所に思われる。この男を罰し鞭打つならば、私はどのようであれと（いうのか）。これも前世からのこの国に子孫を残さなければならぬ縁があったのだろう。早く都に帰って帝にこの事情を奏上せよ」と仰ったので、（蔵人は）どうしようもなく、（ふたたび都へ）上って、帝に「こうこうでした」と申し上げたところ、「仕方ない。その男を罰しても（※1）、今はこの皇女をとり返して都に帰すことはできない。（その）竹芝の男に、生きている限り、武蔵の国を預けとらせて、租税・労役もさせまい。無条件に、姫宮にその国をお預け申し上げなさる」という宣旨が下ったので、（男は）この家を内裏のように造って、（皇女を）住ませ申し上げた家を、皇女たちが亡くなってしまったので、寺にしたのを、竹芝寺というのである。